

入善町じょうべのま遺跡 発掘調査概要

1983年11月

入善町教育委員会

発刊にあたって

昭和54年5月14日に国の史跡指定を受けた「じょうべのま遺跡」については、地主各位のご理解を得て、昭和56年に指定地全域の公有化に成功いたしました。

また、昭和45年6月から数次にわたる発掘調査を実施させていただき、極めて貴重な遺構群を発見いたしました。

今後は、文化庁、奈良国立文化財研究所、県文化課、県埋蔵文化財センター並びに町内外に亘る学識者グループの絶大なご指導とご援助を得て、速やかに遺跡の整備に着手したいものと念願いたします。

このため、今回は、指定地の一部にトレントを設定し、再度必要か所の発掘を行ない、環境整備事業の導入体制を整えたのであります。この調査は、町単独の事業として取り組んだわけではありませんが、舟崎久雄先生には夏休みを返上し、献身的に調査にあたっていただきました。

お陰で、予定地の試掘調査はスムーズに終了し、ここに成果の概報をまとめることができました。調査の期間中ご苦労をおかけした皆さまに、心から感謝申し上げてご挨拶といたします。

富山県入善町教育委員会

教育長 森 栄

目 次

Iはじめに	1
II調査の概要	
1. 調査の経過	1
2. 遺構の経過	1
3. 遺物の概要	2
IIIまとめ	3
第1図発掘調査概略図	4
第2図河川跡概略図	5
図版1D-Ⅲトレント(南から)	6
図版2Fトレント(東から)	6

例 言

1. 本書は、じょうべのま遺跡環境整備計画案策定のために、補充的におこなった試掘調査の概報である。
2. 調査は、入善町単独事業として、入善町教育委員会がおこなった。期間は、昭和58年7月21日から8月5日までのうち9日間である。
3. 調査及び本書の作成は、富山県埋蔵文化財センター・松島吉信氏の助言を得て、水橋高校教諭舟崎久雄がおこなった。なお、田中久栄氏には、調査期間中、連絡所及び飲料水の提供をうけた。記して感謝したい。調査参加者は以下のとおりである。
水橋高校教諭舟崎久雄(調査担当者)・田中久栄・柳平憲二・田中正子・田中トシ子・田中キヨ子・田中てる・田中キヨ・上野すみ子・舟川かほる・舟川のぶ・住久ヨシエ・北尾久子・北尾真稚子・鈴木タカ子・中瀬保子・島明子・古島澄子・宮本恵美子・田中静子・池田カサ・上原ハツエ・三島数枝・池田ヤコ・柳半ヤイ・上原ユリエ・上原ミヨ・村田容子・上野澄子・前田信子(以上地元作業員)
4. 調査事務局は入善町教育委員会におき、庶務は課員の協力を得て社会教育課主任柳沢一郎が担当し、社会教育課長水原広由が統括した。
5. 調査と概報作成にあたっては、じょうべのま遺跡整備計画策定委員会の各氏から指導、助言をいただいた委員は下記のとおりである。
狩野久・田中哲雄・北村文治・渕美・古岡英明・松島吉信・奥田淳爾・右井正雄・西尾三郎・田中久栄・森栄・舟崎久雄

I はじめに

入善町じょうべのま遺跡は、戦前からその存在が知られていたが、遺跡の詳細な内容が判明したのは、昭和45年のは場整備事業がきっかけであった。この年及び翌年の発掘調査によって、A・B地区は平安時代前半の莊所跡であることが、多数の掘立柱建物跡・木簡・墨書き土器その他から判明した。それ以後毎年のように調査は続けられ、A・B地区に関連する遺構がC～F・S～V地区にも広がることが確認され、また、L～O地区には鎌倉時代を中心とする遺構の存在が確認されている。

このような調査の成果をうけて、昭和45年12月にはA・B地区が県指定の、昭和54年にはA～H地区が国指定の史跡となった。それ以後、入善町ではじょうべのま遺跡の環境整備について検討していたが、昭和57年10月、関係行政機関・地元代表者・学識経験者等で構成する「じょうべのま遺跡整備計画策定委員会」が発足し、環境整備計画は本格化した。

今回の発掘調査は、整備基本計画を策定するための補充調査的性格のものであり、特にC地区で昭和56年に検出された、幅30mの河川跡の追求、D地区で昭和46年に推定された入江状の落ち込みの確認等に重点をおいた。

II 調査の概要

1. 調査の経過

発掘調査は、昭和58年7月21日から8月5日のうちの9日間でおこなった。C地区は昭和56年の調査終了後、堤防副堤建設のためほとんど消滅しており、今回の調査対象となったのは、D～H地区である。調査は、各地区に幅1～3m、長さ30～60mのトレチを1～3本ずつ設定し、遺構面を確認した。遺構面はいずれも、は場整備による削平等の影響をうけていると考えられる。調査は長びいた梅雨のためかどらず、また種々の制約のため、トレチを全面発掘することはできず、部分的にならざるをえなかった。特にF～H地区的トレチは、北側1m前後の幅での遺構確認をただけである。

2. 遺構の経過

D-I、E-Iトレチは、L地区からの遺構の広がりを確認するために設定した。

しかし柱穴等の建物跡は確認できず、L地区の建物群はここまで広がっていないと判断される。D-Iトレンチでは、中央部及び南端部西側に地山を検出したが、その他の部分は灰褐色土で、は場整備の際混入したコンクリート片などが混る。E-Iトレンチでは北側に地山を確認したが、南側は黄褐色礫層となる。北端部で落ち込みを検出したが、これはD-Iトレンチからの延長と判断される。地山部分で幅約70cmで、黒色土と灰色砂質土の混る東西方向の浅い溝を検出した。

D-II・E-II・F・G・Hトレンチは、C地区の河川跡を追求する目的で設定した。D-II・E-IIトレンチ及びF・G・Hトレンチの西側半分は、は場整備前は沢であった場所である。D-IIトレンチでは東端部分で西側への落ち込みを検出した。検出位置は、C地区河川跡の東岸とよく一致する。しかし西岸にあたる部分は、このトレンチの西側13m程から礫層となっているため、確認できなかった。E-IIトレンチでも、東側約10mの地点で西への落ち込みを検出した。C地区及びD-IIトレンチとよく一致する位置である。西岸は、砂礫層となるため未確認である。Fトレンチは、東端から約12mまで褐色の礫層であり、トレンチ中央部分では柱穴を確認した。この柱穴群は昭和46年の調査でも確認されており、この部分に接するE地区でも同様に柱穴群が確認されている。Fトレンチ西側20mは落ち込みとなっている。Gトレンチは東端約4mは褐色砂礫層であり、Fトレンチから連続するものと考えられる。トレンチ中央部分には、幅1m前後で南北方向の溝が検出されている。西側25mは落ち込みである。Hトレンチでは、東側15mの範囲で、幅1~3mで南北方向の溝を検出している。Fトレンチの溝と連続する可能性もある。このトレンチの他の部分は落ち込みとなっているが、西端で地山を検出している。以上の5本のトレンチの落ち込みは、は場整備以前の地図等から、沢地帯であったと判断される部分であり、調査の結果も、いずれも上層にコンクリート片等の混入があることから、それを確認することとなった。

D-IIIトレンチは、昭和46年の調査の際、E地区で推定された入江状の落ち込みの北端を確認するために設定した。しかしこのトレンチの調査結果は、先の推定をくつがえすものとなった。すなわち、E地区の落ち込みの北端は、トレンチ南端から6mの地点で検出され、2.5mの地山をはさんで、北側に幅14mの礫混りで東西方向の溝状の落ち込みが検出されたのである。

3. 遺物の概要

今回出土した遺物は、土器・土製品のみである。土器には、須恵器・土師器・珠洲焼・青磁類・越中瀬戸焼等があり、器形的には、杯・杯蓋・壺・甕等になる。土製品としては、太・細両様の土錘がある。これらの遺物は、ほとんどすべてが表上から、混在して出土した。

III ま と め

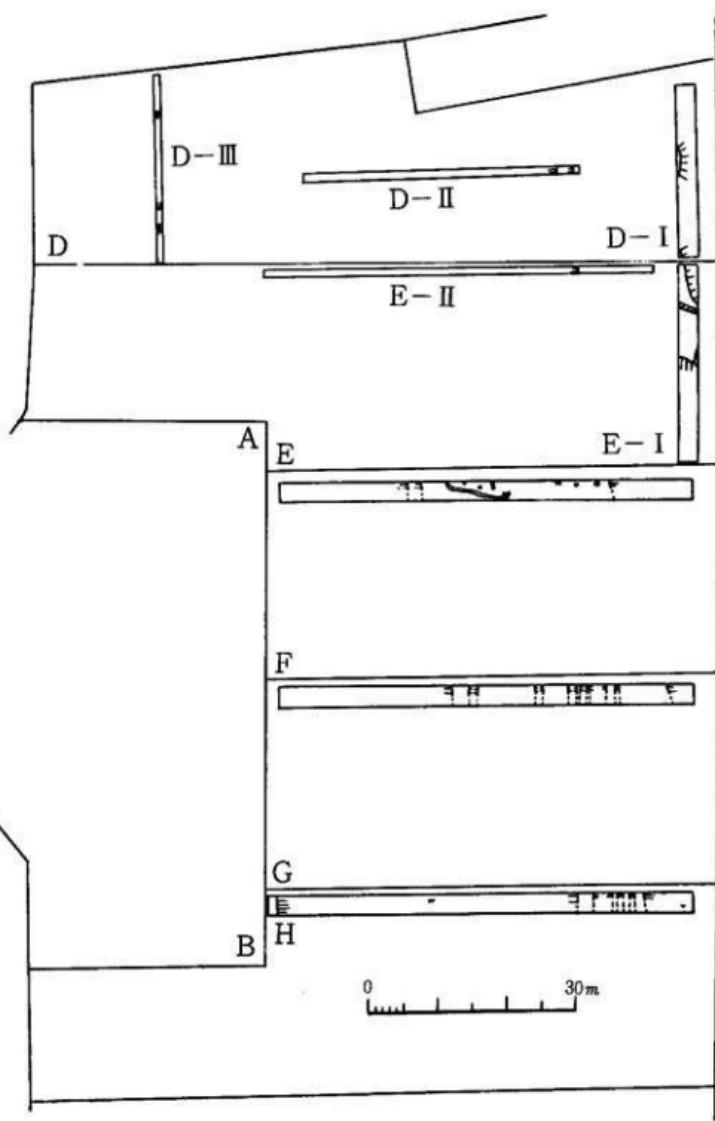
今回の調査の結果をまとめれば、次のようになろう。

1. D-II・E-II・F・G・Hトレンチで確認した落ち込みの東岸は、C地区河川跡と連続する可能性が大きい。西岸はHトレンチ西端の地山がそれに相当するが、これは、A・B地区東側で確認されている落ち込みと連続すると判断される。とすると、河川跡は、Gトレンチでは約40mの幅をもつこととなる。
2. E地区の一部からF地区にかけて、建物群が存在する。

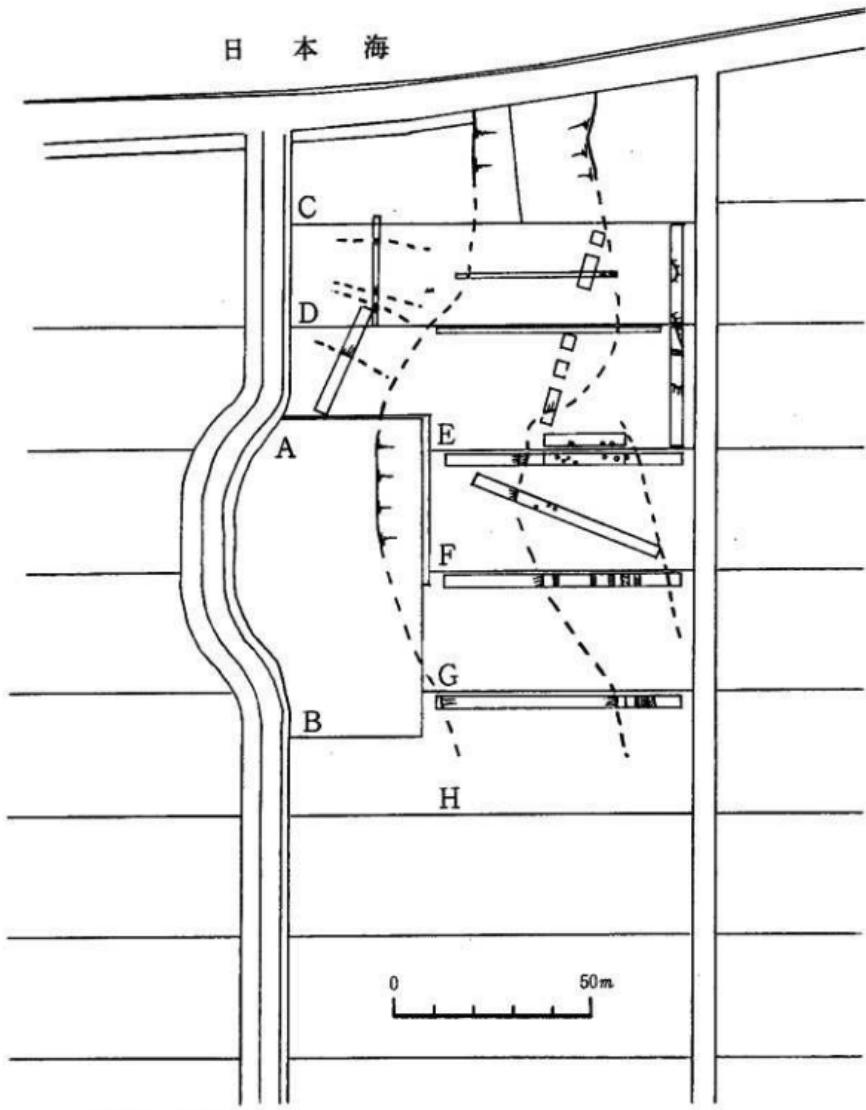
以上のことから、史跡指定地の中央部には幅35~40mの河川が流れ、その東西（A・B地区及びE・F地区）に建物群の存在する景観が復元される。

しかし、より正しく景観を復元するためには、次のような点を明らかにすることが必要となる。

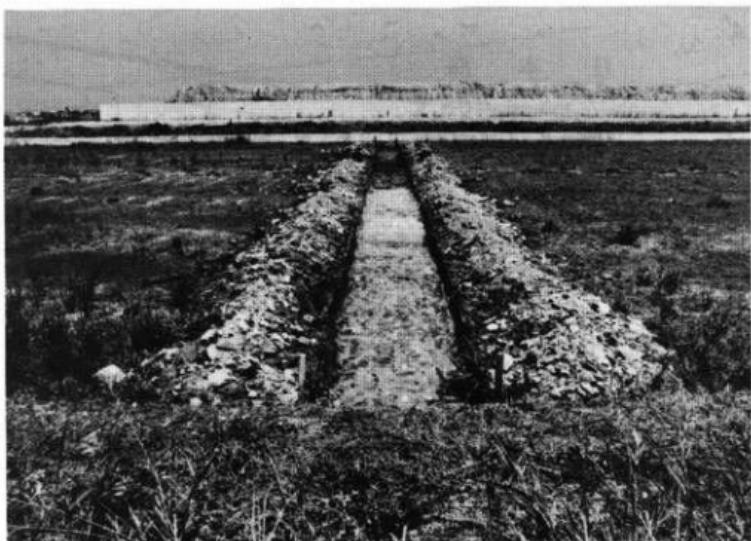
1. D-I・E-Iトレンチで確認された礫層と、D-II・E-IIトレンチの河川跡（落ち込み）とどのように関係するのか。
2. D-IIIトレンチで確認された2本の溝状遺構と河川跡とは、どのように関係するのか。
3. E・F地区の建物群の構成を把握する必要がある。またG~Hトレンチで検出した溝状遺構の性格も確認する必要があろう。



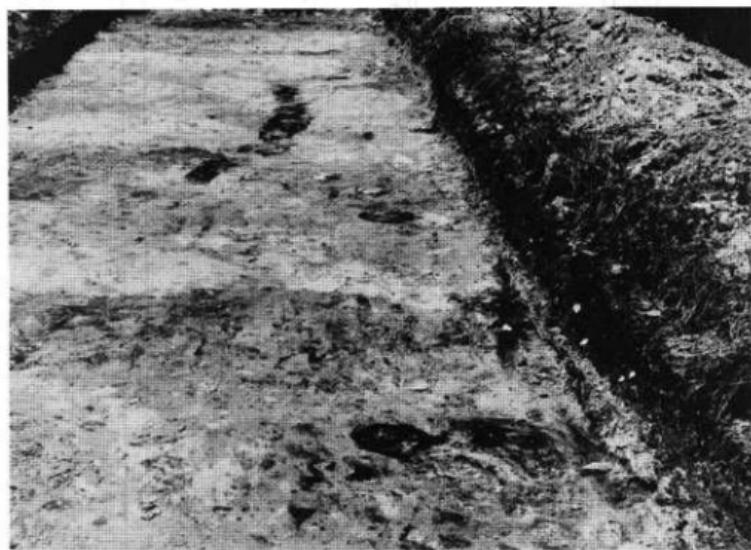
第1図 発掘調査概略図



第2図 河川跡概略図



図版1 D-III トレンチ（南から）



図版2 F トレンチ（東から）

入善町じょうべのま遺跡
発掘調査概要

発行日 昭和 58 年 11 月
発行者 入善町教育委員会
編集者 舟崎久雄
印刷所 池原印刷所